

## 編集後記

私はこれまで臨床工学技士として臨床現場で集中治療に携わってきましたが、現在は大学で教育に従事しつつ、日本集中治療医学会の機関誌編集・用語編集協力委員を拝命しております。ベッドサイドから少し離れた立場になった今、あらためて本誌の原稿に向き合うと、その質の高さと査読のレベルの高さを実感しております。一本一本の論文に対して寄せられる査読コメントには、豊富な臨床経験と専門的知識に裏打ちされた視点が散りばめられており、「この一文をこう直すだけで、こんなに伝わり方が変わるのか」と、画面の前で唸ってしまうこともしばしばです。

教育現場では、学生に対して「良い論文を読み、批判的に考え、自らも発信していくことの大切さ」を繰り返し伝えていますが、編集委員として査読コメントを拝読することは、私自身にとって教育者としての最高の「教科書」になっています。研究の新規性や方法論の妥当性だけでなく、臨床的意義をどう位置づけるのか、多職種がどう協働していくのかといった視点は、そのまま卒業研究指導や大学院教育にも応用できるものです。臨床工学技士として培ってきたテクニカルな視点と、教育者としての視点が、本誌を通じて少しずつつながっていく感覚を覚えています。一方で、このような高いレベルの査読が積み重ねられているからこそ、本誌に投稿するハードルの高さを感じておられる先生方も少なくないかもしれません。しかし、査読は「落とす」ためのものではなく、著者とともに論文を磨き、「より良い形」で世に送り出すための共同作業であると、編集の仕事を通じて強く感じています。とりわけ集中治療領域では、小さな工夫や現場の知恵が、患者予後やチーム医療に大きな差を生むことがあります。臨床工学技士を含む多職種の視点や実践が、論文という形で共有される意義は計り知れません。

本誌が今後も、優れた投稿論文と査読に支えられながら、日本の集中治療を牽引する知のプラットフォームであり続けることを願ってやみません。そして私自身も、臨床と教育の両方の経験を活かしながら、微力ながら編集・用語の面からその一端を担えればと考えております。読者の皆様には、ぜひ臨床の現場で得られた気づきや成果を恐れずご投稿いただき、ともに本誌を育てていただければ幸いです。

(文・千原 伸也)